

2012年7月

木下ちがや

2012年7月は、日本政治史上まれにみる「運動の季節」となった。同月、のべ100万人を超える人々が全国の原発集会やデモに参加した。しかもこの巨大なうねりはいまだとどまることを知らず、わたしたちは日々刻々と未体験の政治過程を歩んでいる。現在も毎週金曜日に首相官邸前で行われている抗議行動はその柱のひとつである。今年の3月に300人ほどの参加者ではじまったこの行動は、6月に入ると参加者が激増し、7月に入ると毎週10万規模の人々が集まる開放空間へと発展していった。エジプト革命の「金曜礼拝後のタハリール広場への結集」を想起させるこの曜日と時間を固定させた定期的な集会は、意欲ある人々が仕事がえりにも気軽に参加し意思表示ができる場として定着をみつつある。

この官邸前に集う人々の怒りを起動させたのは、いうまでもなく野田政権による大飯原発の再稼働である。昨年3月の原発災害をうけ、日本全国の原子力発電所は次々停止し、今年5月にはついに日本全国すべての原発が停止した。ところが野田政権は、世論の猛反発にもかかわらず、原子力資本の生き残りをかけ関西地方の原発の再稼働を強行したのである。

だが、ここで看過してはならないのは、こうした動きが単に政権の方針への反発という一時的、反射的なものとして生じたのではないということだ。その原動力はむしろ、原発事故以来のこの一年半の長い経験の蓄積にある。この一年半、人々は命と暮らしの危機に直面し、インターネットや対話を通じて情報を集め、原発や放射能について学習した。いまからふりかえれば、2011年はこの政治的爆発を生み出す蓄積の時間だった。2011年4月10日に高円寺で開催された「原発やめるデモ！！」の一万人以上の参加者の大半は、はじめてデモを体験する人たちだった。それまで一度もデモに参加したことがなかったある編集者は、勇気を出してこの4月のデモに参加し、以後、50回以上デモに参加しているという。命と暮らしの不安におびえながら、対話と出会い、そして集団であることの力を実感するために人々は街頭へと一歩踏み出しはじめた。こうしたひとりひとりのささやかな実践の積み重ねが、この爆発的な怒りの渦を巻き起こしたのだ。

集会につどう人々の経験や経緯が多様であるほど、その空間はさまざまな人間像を映し出す。夕刻に日が陰りゆくなか、立錐の余地なく人で埋まった歩道で二時間にわたって「再稼働反対」を訴え続ける無数の人々。家族連れが安心して参加できるように設置された「ファミリーエリア」で、自発的に歌をうたいはじめる人々。地下鉄の階段に黙って立っている人。泣いている人。7月29日、参加者は20万人に達し、ついに官邸前の路上が完全開放された。路上にあふれる人々の大半はごく自然に路上に歩みではじめ、幾万の民衆が路上を埋めていく瞬間を、私は前方正面からみていた。こちらに迫りくる人々の熱気と興奮は伝わってくるものの、しかし恐怖感は全くなかった。さあどうしようかとあわてふためきはしたものの、この場所に結集し「未来の一断片」をつかもうとした安保闘争の参加者たちに、50年の時を経て遂に相見えたという想いが湧き上がってきた。1960年、近代化の荒波の最中、日本では日米安保条約改定に反対する数十万の群衆がこの同じ場所を埋め尽くしていた。それは、日本の民衆が主体的に未来を選択しようとした時間だった。しかしそれは、高度経済成長のもとでの「豊かな社会」の登場のなかで、いったんは忘れ去られた経験でもあった。金曜日の官邸前で、若い女性二人がこんな会話をしていたそうだ。「これって、60年安保闘争以来の歴史的なことみたいよ」「そうらしいね」「私たちも何十年か経って、あのとき歴史的なデモに参加したと自分の子供たちに言うときが来るのかな」。

7月の諸行動は政権の暴挙への一時的反応ではない。それは無数の経験と思想がより深くまじりあう機会であり、わたしたちがふたたび過去と出会い、自らが主体的に未来を選択しようとした歴史を奪還する契機でもあった。未曾有の原発事故と生涯にわたるであろう放射能被害に苛まれながら、そして究極の対米従属と新自由主義改革を断行する圧政と真正面から対峙しながら、わたしたちはこの7月を「はじまりの時」と記念しつつ新たな歴史を刻んでいくことにきつとなるだろう。